TAKESHI KAKEHASHI

Official fanclub Newsletter No.19

ご挨拶と近況　　梯　剛之

この半年、皆さまはどのようにお暮らしでしたか。

僕は今回の会報で事務局からご報告頂いているように、2014年度下半期は、石川県小松市、名古屋、東京とダヴィッドさんとのデュオリサイタルを継続してきました。ソロリサイタルも昨年と同じ紀尾井ホールで開きました。この紀尾井ホールでのソロ活動もダヴィッドさんとのデュオも一定の評価をいただいたことで、嬉しく励みになりました(※)。

この実績を踏まえて、2015年度も精進努力して行くつもりですが、どのような年になるか自分でも楽しみなことが幾つか予定されています。例年のようにオーストリアには５月を挟んで概ね２カ月ほど行ってきます。ダヴィッドさんとの演奏活動は勿論ですが、多くの音楽家と出会い、演奏、オペラなどを見聞きすることで自らの音楽への反省や方向性を確認したりしながら充電してきたいと思います。国内では昨年の9月ツアーに引き続き、今年は10月に北海道演奏ツアーを予定しています。その他、海外での演奏は、11月にロンドンへダヴィッドさんとのデュオで行くことになりました。ロンドンはダヴィッドさんが勉強をしたところです。もうひとつモスクワが検討中ですが、ここは久しぶりで、クラシック音楽への造詣の深い聴衆が多く僕自身も好きなところですから、確実になると良いなあ、と、とても楽しみです。

また、黒柳徹子さんのテレビ朝日の番組「徹子の部屋」が主催する“「徹子の部屋」クラシック2015”にも出演が決まり、嬉しく思っています。詳細はこれから詰めるのですが、人気のある音楽の祭典と聞いていますので、多くの方に楽しんで頂けるような選曲をしたいなと思っています。

一方、世界を見渡すと、宗教の解釈による不穏な争いやテロ行為が多く勃発している辛く悲しいニュースが多くなってきました。僕には到底理解できない、音楽を否定する解釈の教えもあるようで、どうにもならない辛さと焦燥感を覚えます。ほんとうに音楽の力で人々の心を少しでも穏やかに、平和を希求する気持ちに目覚めて貰えないものか、考え込んでしまいます。それでも自分に出来ることは何かと云えば音楽しかありません。これからも心の平安、世界の平和を求めて音楽の道をひたすらに歩んでいくことで、少しでも生きるよすがが見付けられるよう人々のためになればと希うばかりです。

最後になりましたが、ファンクラブ立ち上げ時期から言葉にならない程お世話になった、事務局長の山中さんと総務会計の熊谷先生（僕の幼稚園の先生ですので未だに先生です）がその職を辞され新たな事務局体制になりました。この誌面を借りて山中さんと熊谷先生に心からの感謝を申し上げます。

※事務局注：紀尾井ホールライブＣＤがレコード芸術4月号で準特選盤に、ＪＴホールでのダヴィッドさんとのデュオは音楽の友４月号に取り上げられました。情報の頁に詳細掲載致しました。

•目　次

Page 1
◆ご挨拶　　梯　剛之

Page 2-4
◆ﾃﾞｭｵﾘｻｲﾀﾙ顛末記
小松市　木田智滋

Page 5
◆寄稿　梯さんとの出会い
京都　山本泰人

Page 6
◆寄稿　事務局の10年
前事務局長　山中重夫

Page 7
◆日々雑感　梯孝則

Page 8
◆任意団体
子どもに伝えるｸﾗｼｯｸ
活動概要

Page 9
◆任意団体活動報告

Page 10
◆任意団体活動報告
◆PHOTO & NEWS GALLERY

Page 11
◆PHOTO & NEWS GALLERY

Page 12
◆事務局便り

昨年12月、風雪の舞う石川県小松市で、ファンクラブ会員の木田ご夫妻が、梯さんとデュオを組むヴォルフガング・ダヴィッドさんを招聘してコンサートを開催、大成功を収められました。初めて手掛ける大きな演奏会。開催に漕ぎつけるまでのご苦労や、様々な関係者の協力への感謝などエピソードを交えご寄稿いただきました。今後こうした企画をお持ちの方にも大いにご参考になるかと思います。ご寄稿に感謝致します。

デュオ・リサイタル顛末記

石川県小松市　木田智滋

私が初めて剛之さんの演奏を聴いたのは13年前です。金沢で演奏会があり足を運びました。聴き終えたとき涙があふれとても感動したことを今でも鮮明に覚えています。その後、幾度となく剛之さんの演奏会に出かけ、その度ごとに感動を覚えました。何度か聴いているうちに、いつしか私の住み育った小松の人たちにもこの感動を伝えたいと思うようになりましたが、コンサートなど企画したことがなくいつも二の足を踏んでいました。

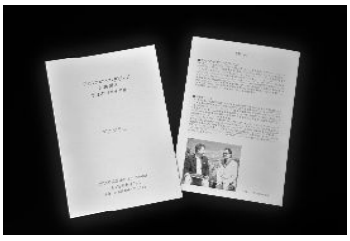
昨年の3月、幸運にも剛之さんとお会いする機会があり、色々な会話をしている中で思い切って胸の内を伝えました。その時は剛之さんのスケジュールが未定で正式な約束にはなりませんでしたが、10日ほどしてご本人からスケジュールの調整が可能であるとの電話をいただきました。しかも今回は、前年デュオを組まれたヴォルフガング・ダヴィッドさんとのデュオ・リサイタルでした。小松でのコンサートの開催は私が持ちかけた話なので即座に了承の返事をしました。と言っても何から始めたらよいのか全くわからず、まずは知り合いの方を頼りに何人かの人に相談をしてみました。しかし「小松でのクラシックコンサートは人が集まらないから難しい」とのことで協力も敬遠気味のものでした。その時はやはり無理なのかなと悔しさでいっぱいになりました。

どうしようかと迷っているうちに日はどんどん過ぎてゆきすでに5月に入っていました。12月のリサイタルを考えるとこのままでは手遅れになってしまいます。もしもチケットが売れ残ってしまっても何とかなるだろう、何よりも剛之さんとの約束のほうが大切だと考え思い切って開催を決断しました。そして最初に相談をした方へ再度出向き開催の旨を伝えたところ、私の熱意を感じて下さったのか、今度は快く応援の返事をいただきました。その上、演奏会の主旨を理解してもらうために、まずは剛之さんがどのような方であるか、また主催者としてこの演奏会に懸ける思い等を綴った文面を用意したほうがよいとのアドバイスをいただきました。同様なことをファンクラブの方からも教えていただき、早速実行し知人や仕事関係等いろんな方々へ文面をお渡ししリサイタルの事前案内をしました。

石川県小松市　こまつ芸術劇場「うらら」

小松でのリサイタルが決まったことを受け、「子供に伝えるクラシック」委員の星田啓子さんから地元の小学校で演奏会を開けないかと打診されました。ちょうどその頃、在住地にある今江小学校の改装工事の建築設計に関わっており、校長先生にその旨を伝えたところ快諾していただきましが、講堂のピアノがとても古く演奏に支障を来さないかと心配されていたので事前に調律師の方と下見に行きました。するとそのピアノは一般のピアノよりも鍵盤の位置が5センチも低い珍しい大きさのピアノでした。後になって分かったことですが、そのピアノは80年ほど前の小野ピアノ「ホルーゲル」というもので、当時製造されたピアノは全国に5台しか残っていない貴重なものでした。剛之さんのお父様に鍵盤の高さのことなどをご相談したところ、いらなくなったピアノ椅子の足を切って高さを合わせれば演奏できるとの返事をいただき、当日の段取りとして準備しました。

リサイタルを開催するには、チケットやチラシ、プログラム等いろいろな印刷物が必要です。出費を抑えるために出来るだけ自分でデザインし、必要なデータは金子マネジャーから頂くことにしました。チラシは、2015年2月のJTホールでのリサイタルと同じデザインのものをソナーレ・アートオフィスにお願いし、チケットとプログラムは自分でデザインして通販の印刷で、演奏曲の解説は金子マネジャーに書いていただきました。また、目の見えないかたのために、点字版のプログラムを八王子六つ星会さんにお願いしました。



金子マネジャーに協力を頂いて作成したプログラム

チケットとチラシが出来上がり、事前にチケットの取りまとめを受けて下さった方々には夫婦二人で足を運び主旨を説明してお願いをして回りました。それがなんと1か月でチケットが不足となり、お預けしていたチケットを返していただくことにまでなり嬉しい誤算でした。また、東京や横浜、関西のファンクラブの方からも、遠く小松にまで足を運んでいただけるとの連絡を受け、涙が出るほど嬉しく感謝いっぱいの気持ちになりました。

今回のリサイタルで会場として選んだのは、こまつ芸術劇場「うららら」の250席の小ホールです（頁左下）。

設置のピアノはスタインウェイとファツィオリとヤマハでした。申込み時には当然のようにスタインウェイを選んでいたのですが、スタインウェイとファツィオリはセミコンサートピアノで、フルコンサートピアノはヤマハだけと知り慌てて金子マネジャーに相談したところ剛之さんはフルコンサートピアノでの演奏を希望されるのではないかとの返事でした。会場に問い合わせるとフルコンサートピアノは大ホール用で小ホールには移動できないとの回答でした。困りはて小松市ピアノ協会の会長に相談に伺ったところ小ホールのつくられた経緯を教えていただきました。この小ホールには、昔ヨーロッパではサロンでコンサートを開いていたように、小さくてもセミコンサートピアノが映える良いホールをつくるというコンセプトがありました。ピアノの選定にはピアニストの江戸京子さんが立ち会われ、ファツィオリは彼女自身がイタリアまで出向いて選定したものだと教えていただきました。その旨を金子マネジャーに伝えセミコンサートピアノで演奏をしていただけないかとお願いしたところ、剛之さんからはファツィオリで演奏をしたいとのお返事をいただきとてもほっとしました。後日談として、剛之さんはファツィオリを弾くのは初めてだったというお話を聞き、それもとても嬉しいものになりました。

ファツィオリでの演奏

演奏会当日を考えると私たち夫婦だけではとても対応できないと思っていたところ、嬉しいことに知り合いの中から何人もお手伝いの申し出がありました。ファンクラブの方々には販売のお手伝いをお願いしました。演奏者のお二人が小松へ来られた時から、今江小学校での「子供に伝えるクラシック」演奏会。「うららら」での会場の段取り、お帰りになるまで。分刻みでスケジュールを立て、お手伝い担当の割り振りをしながら、妻と二人であれやこれやと決めていきました。

今江小学校で梯さんが弾かれた、これも珍しいHORUGEL⇒

いよいよ、お二人とお父様のお出迎えの日になりました。当日は荒天候で東京からの航空機が遅れ、またダヴィッドさんは福井からでしたがこれも大雪のため道路は渋滞しホテルのチェックインは大幅に遅れました。初日からいきなりのアクシデントでした。

小学校会場で質問タイム。右端が木田さん

翌日は「子供に伝えるクラシック」演奏会。全校生徒320人の前でのお二人の演奏です。演奏曲目の多くは生徒たちも知っている曲で、低学年の児童も真剣に聞き入っている様子でした。質問タイムの後はお二人の伴奏に合わせて全校生徒で「ビリーブ」を合唱しました。講堂いっぱいに音楽が響き渡り正に感動の一時でした。（この演奏会の様子は子どもに伝えるクラシックのホームページの活動記録に掲載されています）

うららでの演奏会当日のリハーサルではリハーサルを聴くことの醍醐味を味わいました。この小ホールはとても音響がよく、座席をあちこち移動しながら聴きましたが、どこの席からでも臨場感があり、お二人の奏でる音がより素晴らしく聞こえました。

さあ本番です。開場間際には観客が列をなしその中には沢山の知り合いの顔がありました。開演となりシーンと張りつめた会場にまずバイオリンの音色が。追うようにしてピアノの音色が。鳥肌が立つほどの感動です。前半はベートヴェンのヴァイオリンソナタ第6番イ長調、同じく第8番ト長調。休憩をはさみ後半はフランクのヴァイオリンソナタイ長調。ホールに素晴らしい音が響きわたりました。アンコールはこの日4曲。パガニーニのカンタービレ、ブラームスのハンガリー舞曲7番。たっての希望での剛之さんのソロ演奏はシューベルトの即興曲作品90-2。最後はドボルジャークのユモレスクでした。大きな拍手は鳴りやまず、気づくとあちこちですすり泣きが聞こえました。素晴らしい演奏会となりました。演奏終了後はCDと書籍の販売とサイン会。サイン会には長い列ができ、足を運んでいただいた方が感動の余韻をもって剛之さんとの短い会話を楽しんでいました。小松の人々に剛之さんの素晴らしさが伝わったようです。

木田さんがデザインされたサイン会のポスター

翌朝、ファンクラブの方々が、私のブログを通じて知った近くの木場潟湖畔や白山連峰の風景を一度見たいということで、大型タクシーをチャーターして我が家へお越しになりました。狭いリビングには演奏会でいつもお会いしていたファンクラブの皆さんで一杯に。嬉しくもあり、不思議な光景でした。楽しい時間は瞬く間に過ぎ皆さんはそれぞれの帰路へと就かれたはずでした。ところが、ようやく無事に大役を終えたと一息ついていたところへ一本の電話が入りました。なんと、昨日からの大荒れの天候でJR線と小松空港発着便が全便運休になり、翌日にリハーサルを控えている演奏者のお二人はどうしても今日中に東京へ帰らなければならず途方に暮れているとのことでした。こうなったら荒天候から外れた米原まで車で向かいそこから東海道新幹線しかありません。この事情でどこのレンタカーも空いておらず、あちこちに問い合わせ、ようやく8人乗り1台探すことができました。小松空港で足止めの剛之さんはじめ7人を迎えに行き、いざ米原へ。車は荒天候の横風でハンドルが取られ緊張の運転を強いられました。万一事故でも起こしたら大変なことになるといつも以上に慎重に。しかし何故か剛之さんだけはいつもの冗談を連発。雰囲気を和ませようとしているのか、状況がわからないのか・・・。そんなこんなで何とか米原まで皆様を無事にお送りすることができました。家に戻ったのは夜の9時でした。

長年の想いを剛之さんに伝えたことからのスタート。いろいろと悩み、多くの人たちの理解と協力で何とか無事演奏会が出来たこと。アクシデントのおまけまでつきましたが良い勉強をさせていただきました。この演奏会をきっかけに多くの素晴らしい人達とも知り合うことが出来ました。ちょうど還暦を迎えた私にとっては大切な思い出になりました。（了）

2015年2月21日（土）東京のＪＴホール／ヴォルフガング・ダヴィッド＆梯剛之デュオ・コンサートの後、ファンクラブ会員懇親会を開催。その折初めて参加された京都在住の山本泰人さんからご寄稿いただきました。

§1　私と梯さんの出会い　　山本泰人（京都）

梯さんの音楽を聴くようになって三年経った演奏会で、私はその演奏会で感激のあまり、はじめの一曲が終わるまで、涙が止まりませんでした。まわりを見渡すとすすり泣く音が自分以外にも聞こえる中、梯さんは力強く一曲演奏されました。

そのコンサートはチャリティコンサートでもありましたが、小さな子ども連れのお母さんや、目の不自由な方、コンサートのボランティアとしての手伝いの方など、さまざまな方に勇気や希望を与える演奏会でした。ちょうどショパン生誕200年の年でしたので、梯さんは、ほとんどショパンの曲を弾いていらっしゃいました。私も最後に、梯さんのサイン会があるということで、「プレイズ・ショパン」のアルバムを購入しサインを頂きました。

御自身の目が見えないというハンディを乗り越えるだけでなく、チャリティコンサートを精力的にこなされる梯さんの姿勢は素晴らしいと感じる演奏会になりました。

梯さんの音楽は、傷ついたとき、落ち込んだときに勇気づけられる音楽だなあと感じます。きっと梯さんの音楽は、チャリティコンサートを聴きにくる聴衆に響いていると信じています。

私自身、梯さんの音楽に出会えたのも、クラシック好きの両親の影響もありますし、私自身もおけいこ事でバイオリンを少し習っていたこと、そして、今でも、趣味でバイオリンを続けていることなど、梯さんに負けず劣らず聴く側として、音楽の素晴らしさを感じている今日の日々です。これからも夢に向かって、音楽の道を歩まれる梯さんとのこのご縁を大切に、音楽を聴かせて頂こうと思っています。

§2　私の好きな梯剛之さんの音

梯剛之さんの音楽を聴くようになって、まだ（もう？）８年ほどですが、いつも勇気を与えて頂いています。私の好きな梯剛之さんの音楽として、素人ながら感じたことをここに書かせて頂きます。

まず、梯さんの本当に優しさを感じたのが、「水の反映」というアルバムです。ショパンを弾いているあの優しさはもうなんて言って表現していいのか、あんな優しい音が弾ける梯さんを尊敬します。母親が赤子を抱くような温もりを感じます。「ピアノリサイタル2013」このアルバムで梯剛之さんの完全復活を感じました。20代の若々しい音楽とは、また一味違う完成度の高い充実した響きに一時も気を抜く暇を与えてもらえず、少し強くなった梯さんを感じました。

「デュオ・リサイタル」では、ダヴィッドさんとの息もぴったりで、楽しんで弾いていらっしゃる梯さんがいました。クロイツェルは個人的にとても好きな作品ですが、ピアノとバイオリンの掛け合いは見事で苦悩を乗り越えた、昇華した後の喜びや、もう既に聴く側には楽しいという領域にまで上り詰めているお二人の演奏は、今までの梯さんとは少し違うと感じました。

最新のアルバムの「ピアノリサイタル2014」では、子どものとき「音楽って素晴らしい」と感じたような、童心に戻った純粋な気持ちが感じられました。そして、小曲ばかりを集めた選曲に30歳代の大人の音楽の楽しみ方を感じます。音にも柔らかさが感じられ、包み込むような世界があります。

他にも好きな演奏は多々ありますが、追記を許していただければ、モーツアルトの「トルコ行進曲」のテンポの良さと、力強さが好きです。ショパンの「軍隊ポロネーズ」は梯さんがいかにも勝利をつかむかのような躍動感が楽しいです。（了）

ファンクラブ事務局の１０年を振り返って

山中重夫

この４月末を以て皆様にお世話になった事務局の担当を次の方に引き継いで頂くことになり、早速新事務局より、思い出を書くようにとのご指示で筆を取らせて頂きます。

剛之さんが卒園した「なみのり保育園」でファンクラブの立ち上げ作業をして頂き、その後堀井会長のもと山中と保育園で剛之さんを保育した熊谷で事務局を担当、熊谷が会計と会員証の発行を、それ以外を山中が担当し、「子供に伝えるクラシック」の活動の資金作りのためコンサート会場でのＣＤ等の物販を堀井会長、山中夫婦、熊谷で担当しました。

ファンクラブの大きな特徴の第一は、深い信頼で結ばれていることです。チケット、ＣＤの販売は、市販では代金の振込確認後送付ですが、現物に払込用紙を同封して後からの振込みでも何の問題もありませんでした。また会員さんの中には、１０年分の会費を先行して払われる方などもおられました。また会員は稚内から沖縄まで時にインドネシアにまで及びました。

次の特徴は、剛之さんを支える大きな輪が出来上がっていることです。
剛之さんのコンサートをファンクラブの会員様個人又はその方が所属されるクラブで主催されたものだけで、京都、寝屋川（大阪）、宝塚、八王子、北広島（北海道）、小松（石川）（順不同）に及びました。また会報の作成は、１号は宝塚の会員様が、２号～５号までは、山中と剛之さんのお父様が編集から印刷まで、それ以降１１号までを東京の若い会員さまが、１２号以降は今回事務局を担当頂く星田さんに編集して頂き、印刷を加藤現会長の事務所で、と全てボランティアで行われています。また送付に当たっては、新たに発行された切手にこだわりましたが、そのことに気づかれた方からお礼を言われたこともありました。

ファンクラブ設立の切っ掛けとなった演奏会のチラシ

一方では、点字版会報の作成を剛之さんの幼少から点字翻訳されている八王子在住のファンの方と所属されているボランティアの会にお願いしています。また京都のファンからは、いつも剛之さんのネットで新たな記事が掲載されれば必ずご連絡頂き、それを皆様にメールにて発信してきました。

また苦しい時に、剛之さんの音楽で救われたとのことで毎年多額の寄付をされる名古屋の方、「子供に伝える…」のコンサートにチケットを数十万円分お買い頂いた東京の大学の先生、ファンクラブ割引チケットは、剛之さんの収入を減らすからと割引を遠慮される会員さま、一度もチケットやＣＤを買われないのに創設以来会費を振り込まれている方など支援の輪は幾重にも広がっています。

そして何より事務局をやっていての幸せは、剛之さんの清らかな音楽と彼の素晴らしい人柄に出会えたことです。

音楽会では、ＣＤの物販があるため会場の外で聞くことが多いのですが、東京オペラシティの会場の廊下で、聞こえてきた音色が余りにも清らかで体が動かなくなったことを覚えています。それ以上に剛之さんの素晴らしい人柄です。懇親会に参加された方はご存じですが、彼は、駄洒落（時におやじギャグ）の天才ですが、これは、視覚障害者と健常者を結ぶ有効なツールになっているように思います。このように明るい人柄の奥にはお母様への深い愛と社会への鋭い発言、子供に対する思いやり等音楽同様深い思想があります。また彼には、それを表現する、視覚障害者とは思えないボキャブラリーの豊富さがあります。彼から、テレビを見る、とか、合わせ鏡のようだ、との発言を聞いた時は、わが耳を疑いました。

このような環境の中で皆様に少しはお役に立った仕事を出来たことに大きな幸せを感じています。本当に有難うございました。

最後に、事務局を引き継いで頂く稲田さんは、剛之さんと同世代でウイーンでの後輩です。星田さんは既に事務局に関わっていただいて5年。新事務局もこれまで同様に宜しくお引立てお願い致します。

今月から梯剛之さんのお父様、梯孝則さんから普段着の日常を随筆風に書き留めた文章を頂きます

日々雑感　梯孝則

☆ファンクラブ事務局長山中さん、会計総務担当熊谷さんの交替に際して心からの御礼を

山中さん、奥様、熊谷さん本当に長い間有り難うございました。

ファンクラブが永続できたのもこの御三方のお陰と言っても過言ではありません。山中さんは僕からみると不思議な人です。「ワイはピアノよりヴァイオリンが好きなんや。庄司紗矢香がええなぁ」という人が剛之をあれだけ支えられるということも不思議。関西弁丸出しの毒舌で周りを笑わせている人が美術通だったり、繊細な心配りを垣間見せるのも不思議。とにかく僕が持ち合わせていない要素を沢山持っておられる。「ただの酔っぱらいのおっちゃんやで」あの毒舌の標的に、僕もしばしばなったが、彼流の親愛の情の発露なのだろう。

新旧事務局長/右・山中さん、左・稲田さん

彼は日本の山だけにあきたらず世界の山に登りはじめた山屋でもある。彼に誘われて富士山に登ったり真冬の上高地を経験出来たことは僕にとって貴重な経験になりました。いろんな場面で大変お世話なりました。

梯孝則さんと熊谷さん

熊谷さんは剛之の幼稚園の先生をされていたころからの支援者です。山中さんの奥様は山中さんの意思に応えて面倒なこともニコニコと、ただただ温かな手を差し伸べてきてくださいました。ここまで力を尽くしてくださったことに感謝以外の何らの言葉も見つかりません。皆さまとは末永くお付き合いいただきたいと切望しています。　本当にありがとうございました。

なお、新事務局長は剛之のウィーン音大の後輩に当たる稲田俊介さんが、会計および総務は会員の星田さんが引き受けてくれました。長い付き合いですので心強い限りです。

☆ヴォルフガング・ダヴィッドさんとの出会いに感謝を

ダヴィッドさんと出会えたことは何重もの意義があったと思う。剛之を音楽家として育て上げたのは母親とヴァィスハール先生という二人の女性の力があった。この二人の女性がいなくなったら、グライダーのように滑空して徐々に地上に着地するしかなかろうと僕は思っていた。しかしそうではなかった。二人の女性から離れた剛之は着実に自分の力で上昇を始めた。本当はエンジンを搭載した飛行機だったのだ。人間は生きている間に様々な人との出会いがあり、そんな人との交わりのなかで、影響を受けて変化していく。素晴らしいタイミングで一緒に学びあえるヴァイオリニストの友人が現れたことは剛之にとってとても幸運だった。これから二人で蓄えて行くレパートリーは人の一生でとてもやり尽くせないほど多い。これからもずうっと続けて行って欲しいと願っている。

剛之は12歳でウィーンに行き、ほぼ20年間あちらで過ごしたので、ドイツ語が聞こえる環境の方が落ち着くという。日本語だけの生活は煮詰まる感じがするようだ。僕にはわからない感覚だ。そういう訳でダヴィッドさんとドイツ語で会話をしていると、本当に楽しそうだ。ダヴィッドさんとはヨーロッパでも少しずつ活動範囲が拡がりつつある。そちらも大いに期待している。

☆食事

剛之の食欲はすごい。東日本大震災の時、丁度食事中だったらしいのだが、母親がお箸を取り上げようとしたら抵抗してあの揺れの中食べ続けたそうなので、ちょっとしたものだ。ご多分に漏れず中年太りになって来たので、少しセーブさせたいと思うものの、お代わりを要求されるとつい2杯目をついでしまう。ただ美味しい美味しいと僕が作った食事でも食べてくれるのは有り難い限りだ。

美味しいお料理をいただいてご満悦

梯孝則PROFILE　1962年国立音楽大学入学、1977年N響入団。2003年N響定年。 現在は「古典音楽協会」「アカンサスⅡ」「N響団友オーケストラ」各団員として音楽活動を継続している。♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

子どもに伝えるクラシック　活動報告

2014年度下期の活動実績と現在予定されている活動のご案内です。

♪2014年12月15日（月）
石川県小松市　市立今江小学校
320名の全校生徒さんを対象に演奏会

・・・詳細記事は次頁に掲載。

2014/12/16 石川県 加賀版

全盲のピアニスト 音楽の楽しさ伝え

梯さん 今江小で演奏

国際的に活躍している全盲のピアニスト梯剛之さんも一東京都出身一が十五日、小松市今江小学校であった音楽鑑賞会で演奏を披露した。（前田清市）

「ピリーブ」を演奏する梯さんの演奏で、会場すべての子どもたちが小松市今江小で

鑑賞会は、十六日に梯さんの誕生日の前の日曜日になった。梯さんは、リサイタルで共演するバイオリン奏者のボルフガング・ダビッドさん（オーストリア）と「結びの一つ」として、ベートーベンの「バイオリンソナタ」、ドビッシーの「月の光」、クライスラーの「美しきロスマリン」などを演奏した。途中には、あいさつや質問コーナーも設けた。梯さんは「緊張と対話した。梯さんは「緊張せずもってもらった、ダビッドさんは一静かに聴いてくれればしかった」と話した。

全校児童三百二十人が美しい演奏に聞き入り、最後に二人の演奏で「ピリーブ」を合唱した。児童を代表していずれも六年生の川上桃子さんが謝辞を述べ、高村交彩さんと角地雅花さんが花束を贈った。

梯さんは生後一カ月で小児がんにかかり失明した。四歳からピアノを弾き始め、小学校卒業後にオーストリアのウィーン音楽大学大学院に入学。一九八八年に若手演奏家の登竜門といわれるロン・ティボー国際ピアノコンクール（パリ）で二位に入賞するなどその賞を受け、国際的ピアニストとして活躍している。

♪2015年1月31日
東京都八王子市　市立中山小学校
梯剛之さんの卒業した学校です。・・・詳細記事は10頁に掲載。

❤現在予定されている今後の任意団体活動❤

2015年08月	31日	群馬県　新島中学校・高等学校
2015年10月	2日	山形県　米沢市立第４中学校
2015年10月	23日	北海道札幌市　開成中等教育学校

♥♥子どもに伝えるクラシック事務局より♥♥

ＨＰが出来ました！　　自主活動の都度、動画をＵＰしています。
http://classic-for-children.org/
“子どもに伝えるクラシック”で検索！！

この活動は、主として学校や被災地でのコンサート活動を中心としております。梯さんご自身のピアノ演奏に、演奏家となるまでの生きてきた軌跡、演奏曲の作曲家とその生きた時代背景、人物像、作曲家の想いなどを語ります。そのスピーチを通し、梯さん人生にじかに触れることで、生きる勇気や感動を持っていただいたり、クラシック音楽をより識るきっかけとなったら、と願っています。会員の皆さまの母校やご関係先など、希望される学校がありましたら是非お気軽に下記事務局までご相談ください。　　**事務局　Mail：info@classic for Children**

ＨＰ上で活動資金へのご寄附呼びかけをしております。ご支援頂けましたら幸いです。

❤この活動は非営利任意団体です❤
活動は梯剛之本人からの寄附、皆さまからの演奏・講演依頼と、ご支援としてのご寄付で成り立っております。ご支援のひとつの形として、コンサート会場、お振込によるご寄付を受け付けております。いただきましたご寄付は、交通費やＨＰ更新など広報含め、実質活動経費として有効に使わせていただき、活動の都度、その活動内容を動画と共にＨＰ上に報告致します
【振込先　三井住友銀行　国立支店　普通預金　No.8043907　名義：子供に伝えるｸﾗｼｯｸ　代表　梯剛之】

♪2014年12月15日　　石川県小松市今江小学校でダヴィッド氏とデュオ演奏。

【演奏曲】ベートーヴェン・ヴァイオリンソナタ第8番1楽章／ドビュッシー・月の光／パガニーニ・カンタービレ／ブラームス・ハンガリアンダンス／ドボルジャーク・ユモレスク／クライスラー・美しきロスマリン

小松市立今江小学校で、全校生徒約320名を前に演奏をしました。今回は、子供に伝えるクラシック活動では初めてのヴァイオリンのヴォルフガング・ダヴィッドさんとのデュオ演奏です。

今江小学校は、平成25年に創立140周年を迎えた伝統のある小学校です。演奏に使用されたピアノは、大変古いもので、今は生産されていない小野ピアノ製のホルーゲルでした。これは、80年ほど前に今江小学校に寄贈されたもので、外見はその古さから一部塗装がはがれおち、鍵盤の高さは現在の一般のピアノよりも5センチほど低い特殊なピアノです。梯さんの演奏に支障を来すのではないかととても心配しましたが、梯さんにご理解をいただき、また、入念な調律をしていただいたおかげで素朴で味わい深い音色がよみがえり、梯さんの素晴らしい演奏がさらにピアノの音色を高めていました。

ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第8番から始まった演奏会は、梯さんとダヴィッドさんの息の合った演奏に生徒たちもすっかり引き込まれ、まだ小さな低学年の子どもたちも真剣に聴き入っている様子でした。曲の合間のトークでは、ダヴィッドさんがドイツ語を話されるので、梯さんに通訳をしていただきました。梯さんには、お二人での演奏とトークに加えてドイツ語の通訳までもと、一人で3役をこなしていただき、とても大変だったと思いますが、子どもたちからの質問タイムではご自分から質問のリクエストをなさったりもし、時間は和やかに過ぎていきました。

最後は、今江小学校の12月の生徒合唱曲の「BELIEVE」を、梯さんと、当日初見で弾いて下さったダヴィッドさんの演奏に合わせて生徒たちが合唱をしました。お二人の演奏と1年生から6年生までの生徒たちが一体となり、歌は講堂いっぱいに響き渡って将に感動の時でした。この貴重な体験をした子どもたちが、いつかそれを思い出し、自身の未来に少しでも活かすときが来ることを願っています。

この活動は、地元テレビ局・北陸放送（TBS系列）の当日のニュース番組やテレビ小松でも紹介されました。

（記事・木田徳子）

事務局便り－１

ファンクラブ懇親会を開催（東京）しました

2015年２月２１日のＪＴアートホールでのコンサート後、梯剛之さん、ヴォルフガング・ダヴィットさんを囲んでの懇親会（於：ＪＴビル内の中華料理・黄鶴楼）を開催。東京はもとより愛知県、石川県、兵庫県、京都府の会員の方も駆けつけてくださり、37名での懇親会となりました。冒頭、梯剛之さんからのご挨拶に始まり、元会長の堀井さん、会員の方々、締めくくりはお父様孝則さんの明るい謝意に満ちたご挨拶でした。

＜事務局より＞なかなかお目にかかれない会員の方々ともこうした機会に交流を深め、懇親と共に、情報共有をしたく存じます。梯さんも強く希望して居られ、いつも大変気楽な和やかな会になっております。おひとりで参加される方も多く居られます。お気楽に是非お出かけくださいますよう。

♪２０１５年１月３１日（日）八王子市立中山小学校（梯さんの母校）

【演奏曲】ドビュッシー・月の光／ラヴェル・ソナチネ／
ショパン・幻想即興曲・夜想曲20番／　シューベルト・即興曲
＜花は咲く＞＜ビリーブ＞の２曲を梯さんの伴奏で児童全員で合唱

中山小学校全景

この演奏会の前日は東京でこの冬初めてといっていい降雪でした。会員の上海道さんがまさにその雪の日、さっむーい中で３時間半かけて梯さんのためのピアノ調律をしてくださった体育館がコンサート会場です。中山小学校は昭和５５年創立。生徒８５名、先生２２名、保護者および地域の方々１８０名、計２８７名の皆さんが会場に集いました。梯さんの同級生の親御さんも数名お越しのようでした。中山小学校校歌を全児童が歌って迎える中、梯さんが稲田さんと腕を組んで登場です。お父様の梯孝則さん、この企画のためにご尽力なさった山中さん、調律師の上海道さん他の皆さんも続きました。

私自身は梯さんの学校訪問での演奏は初めて。児童の反応にはとても関心がありました。いつもの体育館、ということもあるのでしょうがなんとなくごそごそと動いている児童も、実はいました。それが子どもらしいところなのでしょう。しかし、梯さんがアンコールのシューベルトを演奏しているとき、ドッサーン、という大音響が！（後で体育館の屋根の雪が落ちた音と分かりました）児童たちは全員、窓のほうを向きました、が、そんな大音響など耳に届かなかったかのように、自分の世界に向き合っている梯さんを見て、一瞬で元の姿勢に戻ったのは印象的でした。

願わくは、梯さんのあのピュアなピアノの音が児童みんなの心に焼き付いていますように。

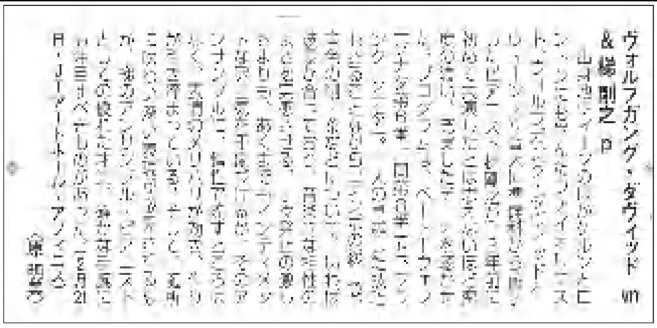
（記事　松本節子）

PHOTO ＆ NEWS　GALLERY

音楽誌レコード芸術4月号誌上で、2014年10月6日紀尾井ホールでの演奏LIVE CDが準特選盤となりました。
2月ＪＴホールでのデュオも音楽の友4月号で取り上げられました。
事務局では、会員割引でこのＣＤをお分け致します。申込等詳細は次頁の事務局便りをご覧ください。

音楽の友　４月号
２月ＪＴホール演奏論評

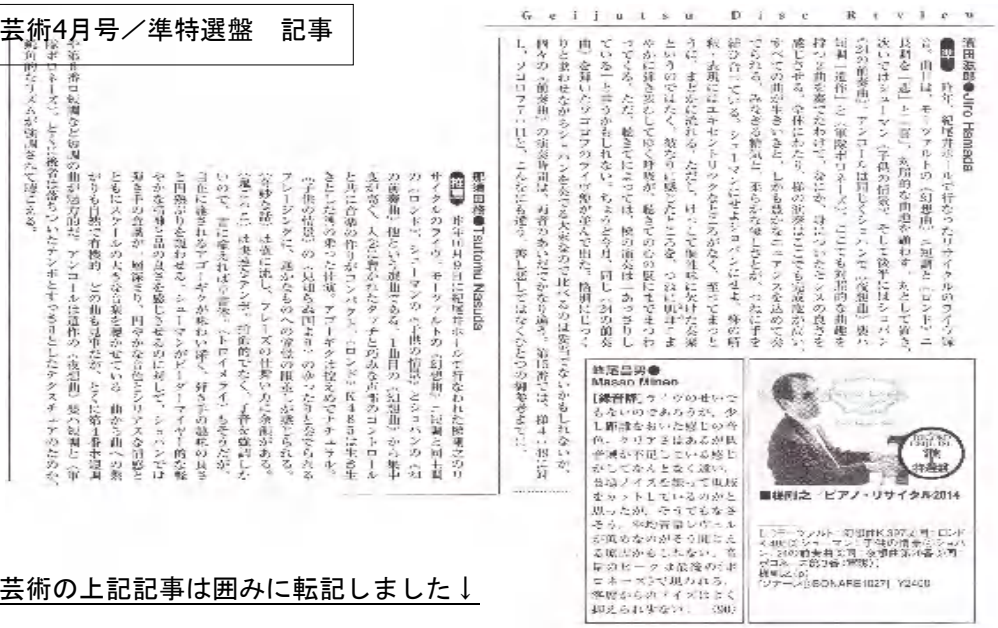
♪記事は下記囲みに転記しました↓



ヴォルフガング・ダヴィッド　ｖｎ　＆　梯剛之　Ｐ
出身地ウィーンの他ケルンとロンドンにも学んだヴァイオリニスト､ヴォルフガング・ダヴィッドと、ウィーン国立音大に準備科から留学したピアニスト梯剛之が、２年前に初めて共演したとは思えないほど密度の濃い、充実したデュオを聴かせた。プログラムはベートーヴェン「ソナタ第6番」「同第8番」とフランク「ソナタ」。二人の卓越した技巧もさることながら、テンポの緩・急・音色の剛・柔などについて、いわば波長が合っており、音楽的な相性の良さを実感させる。丁々発止の激しさよりも、あくまでもインティメットな雰囲気を印象づけるが、そのアンサンブルに、惰性で流すところはなく、表情のメリハリが効き、作りが引き締まっている。そして、随所に味わい深い表現が散見されるなか、梯のアンサンブル・ピアニストとしての優れた才覚、確かな手腕にも注目すべきものがあった。（２月21日・ＪＴアートホール・アフィニス）　＜原　明美＞

PHOTO ＆ NEWS　GALLERY

レコード芸術4月号／準特選盤　記事



Geijutsu Disc Review

濱田滋郎●Jiro Hamada

(準)　昨年、紀尾井ホールで行なったリサイタルのライヴ録音。曲目は、モーツァルトの《幻想曲》ニ短調と《ロンド》ニ長調を「悲」と「喜」、対照的な曲趣を顕わす一対として置き、次いではシューマン《子供の情景》。そして後半にはショパン《24の前奏曲》。アンコールは同じくショパンで《夜想曲》嬰ハ短調「遺作」と《軍隊ポロネーズ》。ここでも対照的な曲趣を持つ２曲を奏でたわけで、なにか、身についたセンスの良さを感じさせる。全体にわたり、梯の演奏はここでも完成度が高い。すべての曲が生きいきと、しかも豊かなニュアンスを込めて奏でられる。みなぎる精気と、柔らかな優しさとが、つねに手を結び合っている。シューマンにせよショパンにせよ、梯の解釈・表現にはエキセントリックなところがなく、至ってまっとうに、まどかに流れる。ただし、けっして個性味に欠けた奏楽というのではなく、彼なりに感じたところを、常に肌理こまやかに弾き表してゆく呼吸が、聴き手の心の襞にまでまつわってくる。ただ、聴きてによっては、梯の演奏は「あっさりしている」と言うかもしれない。ちょうど今月、同じ《24の前奏曲》を弾いたソコロフのライヴ盤が並んで出た。格別にじっくりと歌わせながらショパンを奏でる大家なので比べるのは妥当でないかもしれないが、個々の《前奏曲》の演奏時間は、両者のあいだでかなり違う。第15番では、梯4：49に対し、ソコロフ7：11と、こんなにも違う。善し悪しではなくひとつのご参考までに。

那須田務●Tsutomu Nasuda

(推薦)　昨年10月9日に紀尾井ホールで行われた梯剛之のリサイタルのライヴ。モーツァルトの《幻想曲》ニ短調と同主調の《ロンド》、シューマンの《子供の情景》とショパンの《24の前奏曲》他という選曲である。１曲目の《幻想曲》から集中度が高く、入念に磨かれたタッチと巧みな声部のコントロールと共に音楽の作りがコンパクト。《ロンド》K485は生き生きとした興の乗った佳演。アゴーギグは控えめでナチュラル。《子供の情景》の<見知らぬ国より>のゆったりと奏でられるフレージングに、遥かなものへの憧憬の眼差しが感じられる。<奇妙な話>は横に流し、フレーズの仕舞い方に余韻がある。<鬼ごっこ>は快速なテンポ。拍節的でなく、子音を強調しないので、書に喩えれば草書体。<トロイメライ>もそうだが、自在に施されるアゴーギグが味わい深く、弾き手の趣味の良さと円熟ぶりを窺わせる。シューマンがピーダーマイヤー的な軽やかな精神と品の良さを感じさせるのに対して、ショパンでは弾き手の意識が一層深まり、円やかな音色とシリアスな情感とともにスケールの大きな音楽を聴かせている。曲から曲への繋がりも自然で有機的。どの曲も見事だが、とくに第４番ホ短調や第６番ロ短調など短調の曲が魅力的だ。アンコールは遺作の《夜想曲》嬰ハ短調と《軍隊ポロネーズ》。とくに後者は落着いたテンポとすっきりとしたテクスチュアのためか、鋭角的なリズムが強調されて聴こえる。

峰尾昌男●Masao Mineo

【録音評】　ライヴのせいでもないのであろうが、少し距離を置いた感じの音色。クリアさはあるが低音域が不足している感じがしてなんとなく遠い。会場ノイズを嫌って低域をカットしているのかなと思ったがそうでもなさそう。平均音量レヴェルが低めなのがそう聞こえる原因かもしれない。音量のピークは最後の《ポロネーズ》で現れる。客席からのノイズはよく抑えられ少ない。<90>

レコード芸術の上記記事は囲みに転記しました↓

濱田滋郎●Jiro Hamada

(準)昨年、紀尾井ホールで行ったリサイタルのライヴ録音。曲目は、モーツァルトの≪幻想曲≫ニ短調と≪ロンド≫ニ長調を「悲」と「喜」、対照的な曲趣を顕わす一対として置き、次いではシューマン≪子供の情景≫。そして後半にはショパン≪24の前奏曲≫。アンコールは同じくショパンで≪夜想曲≫嬰ハ短調「遺作」と≪軍隊ポロネーズ≫。ここでも対照的な曲趣を持つ２曲を奏でたわけで、なにか、身についたセンスの良さを感じさせる。全体にわたり、梯の演奏はここでも完成度が高い。すべての曲が生きいきと、しかも豊かなニュアンスを込めて奏でられる。みなぎる精気と、柔らかな優しさとが、つねに手を結び合っている。シューマンにせよショパンにせよ、梯の解釈・表現にはエキセントリックなところがなく、至ってまっとうに、まどかに流れる。ただし、けっして個性味に欠けた奏楽というのではなく、彼なりに感じたところを、常に肌理こまやかに弾き表してゆく呼吸が、聴き手の心の襞にまでまつわってくる。ただ、聴きてによっては、梯の演奏は「あっさりしている」と言うかもしれない。ちょうど今月、同じ≪24の前奏曲≫を弾いたソコロフのライヴ盤が並んで出た。格別にじっくりと歌わせながらショパンを奏でる大家なので比べるのは妥当でないかもしれないが、個々の≪前奏曲≫の演奏時間は、両者のあいだでかなり違う。第15番では、梯4：49に対し、ソコロフ7：11と、こんなにも違う。善し悪しではなくひとつのご参考までに。

那須田務●Tsutomu Nasuda

(推薦)昨年10月9日に紀尾井ホールで行われた梯剛之のリサイタルのライヴ。モーツァルトの≪幻想曲≫ニ短調と同主調の≪ロンド≫、シューマンの≪子供の情景≫とショパンの≪24の前奏曲≫他という選曲である。１曲目の≪幻想曲≫から集中度が高く、入念に磨かれたタッチと巧みな声部のコントロールと共に音楽の作りがコンパクト。≪ロンド≫K485は生き生きとした興の乗った佳演。アゴーギグは控えめでナチュラル。≪子供の情景≫の<見知らぬ国より>のゆったりと奏でられるフレージングに、遥かなものへの憧憬の眼差しが感じられる。<奇妙な話>は横に流し、フレーズの仕舞い方に余韻がある。<鬼ごっこ>は快速なテンポ。拍節的でなく、子音を強調しないので、書に喩えれば草書体。<トロイメライ>もそうだが、自在に施されるアゴーギグが味わい深く、弾き手の趣味の良さと円熟ぶりを窺わせる。シューマンがピーダーマイヤー的な軽やかな精神と品の良さを感じさせるのに対して、ショパンでは弾き手の意識が一層深まり、円やかな音色とシリアスな情感とともにスケールの大きな音楽を聴かせている。曲から曲への繋がりも自然で有機的。どの曲も見事だが、とくに第４番ホ短調や第６番ロ短調など短調の曲が魅力的だ。アンコールは遺作の≪夜想曲≫嬰ハ短調と≪軍隊ポロネーズ≫。とくに後者は落着いたテンポとすっきりとしたテクスチュアのためか、鋭角的なリズムが強調されて聴こえる。

峰尾昌男●Masao Mineo

【録音評】ライヴのせいでもないのであろうが、少し距離を置いた感じの音色。クリアさはあるが低音域が不足している感じがしてなんとなく遠い。会場ノイズを嫌って低域をカットしているのかなと思ったがそうでもなさそう。平均音量レヴェルが低めなのがそう聞こえる原因かもしれない。音量のピークは最後の≪ポロネーズ≫で現れる。客席からのノイズはよく抑えられ少ない。<90>

事　務　局　便　り

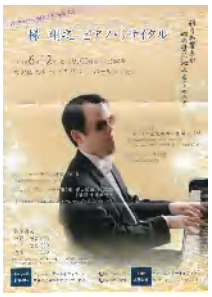
事務局長他交替のお知らせ

この度、事務局が新しくなりました。10年の長きに亘り事務局長を務めてくださった山中さんと、事務局の会計を担当された熊谷さんが共に退かれ、新たに、稲田俊介と星田啓子がその任に当たることになりました。不慣れでお目だるいことも多々あるかと存じますが、様々にご意見を頂戴しながら務めさせていただく所存です。これに伴い、種々連絡致しますメイルアドレス、住所FAX番号が変更となりますので、ＰＣへの登録等書き換え含め宜しくお願い致します。

新事務局E-mail：takeshikakehashiofc@gmail.com
新事務局所在地：214-0038　神奈川県川崎市多摩区生田6-10-8-202 稲田俊介方
新事務局電話：090-6448-9324（稲田）　　FAX：03-3421-9772

コンサート・チケット情報（コンサート詳細情報　別紙一覧ご参照ください）

チケット申込に関して、今回は当事務局の取り扱いと、ソナーレ・アートオフィス取り扱いに分かれますので、どうぞご注意ください。



❤6月12日（金）梯剛之ピアノリサイタル
大田区民ホール・アプリコ　小ホール　　19：00開演
☆主催・チケットの申し込み：ソナーレ・アートオフィス
電話：03-5754-3102　ファックス：03-5754-3103
info@sonare-art-office.co.jp ※お申し込みの際、必ず「ファンクラブ会員」とお伝えください。

❤６月14日（日）東久留米交響楽団　第24回定期演奏会　指揮：田中良和
東久留米市立生涯学習センター　まろにえホール　　14:00開演　※全席自由　￥500
☆チケットの申込：上記新事務局宛てお申し込みください。

❤７月29日（木）「徹子の部屋」クラシック2015　Bunkamuraオーチャード・ホール
18:00 開演（予定）割引は出来ませんが入手困難なチケットで、数に限りがあります。
☆主催・チケットの申し込み：ソナーレ・アートオフィス

❤11月29日(日)　プロースト交響楽団　第22回定期演奏会
ミューザ川崎シンフォニーホール　14：00開演
☆事務局での取り扱いはありません。チケットぴあ、ホール直接の取り扱いになります。

LIVE-CD情報　§下記新盤ＣＤを会員価格で販売します§

♪《梯 剛之　ピアノ・リサイタル2014》　（レコード芸術準特選盤）
2014年10月6日　紀尾井ホールライブ・ﾚｺｰﾃﾞｨﾝｸﾞ　　アンコール含め全曲収録
§事務局販売価格2,400円（消費税、送料込）§
❤上記事務局宛てお申込みください。ＣＤ本体に併せて振込用紙を同封して送付します❤
♪≪ＪＴホール　デュオリサイタル≫⇒年内リリース！

編集発行　2015年4月吉日

梯剛之オフィシャルファンクラブ事務局
発行人　事務局長　稲田　俊介　　編集人　星田啓子
〒214-0038　神奈川県川崎市多摩区生田6-10-8-202
E-mail:　takeshikakehashiofc@gmail.com
電話：090-6448-9324　FAX: 03-3421-9772

協　力：米沢信用金庫 ／ ＮＰＯ子どもに伝えるクラシック

“子どもに伝えるクラシック”
下記のｗｅｂで活動状況更新をしています
http://classic-for-children.org/

梯剛之公式HPもご覧ください。
http://kakehashi-takeshi.com/JA/index.html